



笑えない話

大井 道夫

(本基金理事・(財)国立公園協会会長)

昨今はグルメブームである。「食ハ広州ニ在リ」という中国の俗諺をご存知だろう。これと一連のものに、「生ハ蘇州ニ在リ」、「衣ハ杭州ニ在リ」がある。前者は生まれてくるなら蘇州がよい。蘇州の人は親切でお祝をはずむからということだろう。後者も同じく、衣服を買うなら杭州で買うのがいい。織物の生産地だからということだ。もう一つ俗諺がある。

「死ハ柳州ニ在リ」である。柳州は広西チワン族自治区の都邑で柳の産地である。その柳は柩の材料となるので、柳州で死ねば柩が格安で手に入るというほどの意味だろうか。

いずれも中国らしい大陸的な俗諺であるが、とりわけ最後のが面白い。この言葉を思い出したのはほかでもない、熱帯林の解説がしてあるパンフレットを読んでいたら、つぎのようなショッキングな文章に出会ったからである。

「約1,000立方メートルのアバチ材が毎年、スイスで柩づくりに利用されている。人間と熱帯林が、こんなところで、お互いの終末を一緒に迎えているわけである。」

この文章にあるアバチとはどんな樹木か、にわかに好奇心がわいてきた。そこで、2、3人の植物学者に聞いてみたが分らない。とうとう、パンフレットを作った人に質すこととなった。『世界有用植物事典』にあるオベチエだという返事だった。

アバチ、英語では Obeche, African Maple, 西アフリカの熱帯雨林のなかの樹木である。材は淡黄色、大径材が得られ加工しやすいという。だから、柩材としても使われるのだろう。

ひょっとしたら、わが国の柩材も経済的理由から熱帯産材が使用されているのかもしれない。私たち日本人も、カリマンタンの熱帯雨林と、そこに棲むオラン＝ウータンと運命をともにするのかもしれない。笑えない話である。

平成6年度助成事業の報告

平成6年度本基金の助成は総額 3,400万円

(財)日本自然保護協会との共同事業による公募助成 18件 2,200万円

(財)世界自然保護基金日本委員会の事業助成 1件 200万円

その他の助成 4件 1,000万円

が決定、11月以降平成7年にかけて助成を行う。(内容は次頁以下に紹介)

平成6年度本基金の助成内容

○プロ・ナトゥーラ・ファンド第5期助成先一覧
(本基金と(財)日本自然保護協会との共同事業による助成)

NO.	タイトル	グループ名	代表者	助成額:千円
-----	------	-------	-----	--------

・国内研究助成

1 (数)	コシガヤホシクサの保護増殖に関する研究	コシガヤホシクサ研究グループ	宮本 太 (東京農大)	550
2 (数)	シマフクロウの生息環境の保全に関する研究	シマフクロウ研究グループ	小野 有五 (北海道大)	1,430
3 (数)	御蔵島原生自然植生域の生態学的研究	御蔵島自然研究グループ	星野 義延 (東京農工大・農)	1,300
4	能取湖アッケシソウ群落の保全	グローバル塩性湿地研究会	加藤 茂 (東京農業大・農学部 研)	1,300
5 (数)	野生生物の保護に係わる国際条約の具体化に関する研究	野生生物の保護に係わる法体制検討会	磯崎 博司 (岩手大・人文社会)	850
6	神津島及び新島における食物連鎖構造の解明と移入動物の影響	島嶼生態系研究会	長谷川雅美 (千葉県立中央博物館)	1,300
7	奥日光におけるニホンジカの植生に及ぼす影響と生態系の保護管理	奥日光シカ研究グループ	小金沢正昭 (宇都宮大・農)	1,200
8	半野生シカの給餌の影響とホームレンジ利用に関する研究	金華山島シカ行動研究グループ	高槻 成紀 (東京大・農)	1,000
9	日本国内におけるカメ類の分布および生息状況	日本カメ類研究会	矢部 隆 (名古屋大・人間情報学)	1,200

・国内活動助成

10	希少ウミスズメ類の現状と保護	日本ウミスズメ類研究会	青山 莞爾	2,000
11	穴塚大池自然環境総合報告書の作成	穴塚の自然と歴史の会	森本 信生	1,040
12	サハリンにおける野鳥保護思想の普及	極東鳥類研究会	藤巻 裕蔵	1,070
13	岩木山の景観と生物相の保全のための自然保護活動	岩木山を考える会	正木 進三	600
14	名古屋近郊の里山(海上の森)を守るための調査および資料集の作成 - 県立自然史博物館の森構想の提案に向けて -	ものみ山自然観察会	曾我部行子	690

・海外研究助成

No.	タイトル	代表者	所属機関	助成額:千円
15	ジャコウジカの保護管理のための生態と行動に関する研究	盛 和林 (中国)	中国華東師範大学	1,080
16	タンガニーカ湖の生物多様性と その保護	Masta Mukwaya GASHAGAZA (ザイール)	ザイール国立自然科学 研究センター ウビナ新	1,870
17 (数)	バイカル湖、セレンガ川及びセレンガデルタ環境の生態化学的モニタリング-生物相保全の視点にたって-	Albert Beim (ロシア)	バイカル湖水環境研究会	1,280
18	キナバル山域の蛇紋岩植生の調査	Lamri Ali (マレーシア)	サバ州公園局	2,240

助成金総額

18件 22,000千円

(財)世界自然保護基金日本委員会の独自事業助成

- ・白保サンゴ礁保護研究センター（仮称）準備室の設置と普及活動の実施

助成額：200万円

WWF-Japanが企図する上記センターの開設までには、なお時日を要する状況なので、とりあえず現地に準備室を設け、その中にサンゴ礁保護に関する展示を行うと共に、地元民・観光客の理解を得るためのPR、教育活動を行う。

-
- ・フィリピンの絶滅危惧植物のレッドデータ・ブック作成

ドミンゴ・A・マドゥリッド

（フィリピン国立博物館植物学部長）

助成額：500万円

現在フィリピンにおいては、植物誌の編纂事業が進められてはいるが、森林伐開により多くの植物の種が絶滅又は絶滅の危機に追いやられている。このためにレッドデータ・ブックの作成が急務であり、日本の植物学者の支援を得て、その作業を行うもの。3ヵ年計画の初年度分を当基金で助成する。

- ・北海道湿原の変遷と現状の解析（継続分）

北海道湿原研究グループ

代表者 辻井達一（北海道大学教授）

助成額：200万円

昨年度の助成により、各地湿原の調査を行ったが、この事業は特定の箇所ではなく、北海道の湿原を全体的に学術調査するという画期的な試みであり、1年では時間的に充分ではないため、更に1年補完調査を行い、湿原のレッドデータ・ブック作成の基礎データを整備する。

- ・サハリンの自然保護区及び近隣地区における自然環境調査（継続分）

サハリン自然環境調査グループ

代表者 伊藤浩司（静修女子大学教授）

助成額：200百万円

昨年度の助成により、ロシア・サハリン州自然保護委員会との共同事業として、主に南サハリンの調査を行ったが、更に北ポロナイスク自然保護区を対象とした調査を進める。

- ・長良川河口堰事業モニタリング調査（継続分－5年間調査の第2年度）

長良川河口堰モニタリング調査グループ

代表者 田中豊穂（中京大学教授）

助成額：100百万円

引き続き2年目の調査を続行し、各指標の変化を見守る。



自然の悲鳴が聞こえる



子供のころ毎年夏は海で暮らし、豊かな情操と健康を授かった。戦後海辺は汚れて泳ぐ気がしなくなった。青年期からは40年間山を歩き、同じ恩恵を受けて来た。だが年ごとに山膚は裂かれ、森が伐られ、流れは涸れ、お花畑が荒らされるのを見た。自然の悲鳴が聞こえてくる。これでは日本から自然が消えてしまうと心が痛む。

ある年カナディアン・ロッキーに入った。国立公園の入口で呉れたパンフレットの頭にこう書いてあった。「貴方は熊の国にいます。ここは何千年来熊の故郷でした。貴方はビジターに過ぎません。このことを弁えて行動して下さい。」 そうだ、野生を人と対等に置く見方、これこそ私達日本人が忘れてしまった思想ではないか。我々を育ててくれた自然への畏敬と思いやり、これを復活させなくてはと思ったことが、いままで漠然と自然への危機感を抱いていた私を、自然保護に開眼させたのだった。

いま私は自然から受けて来た限り無い恵みに対し、残りの人生をその「恩返し」に捧げたいと思うのである。

岡本寛志（専務理事）

P. N. ファンドの助成による本年度刊行物一覧

本年中にP. N. ファンドの助成によって刊行された出版物は次のとおりです。

- ・シカの四季-五葉山のシカと自然- : 五葉山シカ研究グループ
- ・日本の地形レッドデータブック (第1集) :
日本の地形レッドデータブック作成委員会
- ・NACS-Jエコツアーリズム・ガイドライン : 日本自然保護協会
- ・秋田県田沢湖町駒ヶ岳山麓イヌワシ調査報告 : 同上
- ・千歳川放水路計画の問題点 第一次報告書 : 同上
- ・プロ・ナトゥーラ・ファンド第1期第2期助成成果報告書 : 同上
- ・長良川下流域生物相調査報告書 : 長良川下流域生物相調査団
- ・ピクチャー・カード 森の観察会をしよう! : 日本自然保護協会
- ・サンゴ礁がはぐくむ島-亜熱帯の自然 石垣島 : 同上 (ビフォー)
- ・森の国のイヌワシ : 同上 (ビフォー)

編集後記

未だ慣れぬまま第3号をお届け致します。松山の給水制限がやっと解除されました。でも今年の異常気象の影響はいろいろのところでまだ尾をひきそうです。色丹島の地震の後遺症も本当にお気の毒です。一方お米やリンゴは豊作とか、良いことも少しはなければなりません。来年は自然にとっても、人間にとっても良い年でありますように、祈ってやみません。お寒さ厳しくなると思いますが、どうぞ皆様ご健康にご留意ください。 岡本和子記

Pro Natura ニュース第3号

発行者：財団法人 自然保護助成基金
発行年月日：平成6年12月1日

〒150 東京都渋谷区松涛1-25-8
松涛アネックス2階
TEL:03-5454-1789 Fax:03-5454-2838